

## 環鳥海 フォーラム「白砂青松復活プロジェクト」

### 司会

本日は白砂青松復活プロジェクトフォーラムご参加頂き有難う御座います。  
本日の司会進行勤めさせて頂きます秋田県由利地域振興局総務企画部近藤と申します。宜しくお願い致します。大会に際しましてお願いが御座います。携帯電話ポケットベルなどの電源をお切りになるかマナーモードにして頂きますよう宜しくお願い致します。それでは大会に当たりまして、秋田県由利地域振興局長井上文男よりご挨拶申し上げます。



### 井上

ご紹介頂きました由利地域振興局の井上です。皆様には大変お忙しいところ、この環鳥海白砂青松復活プロジェクトフォーラムを近く開催しましたところ、この様に大勢の皆様が出席して下さいまして本当に有難うございます。また本日のフォーラムの開催に当たりまして大変なご協力を戴きました象潟町の横山町長さん始め、横山助役さん、そして関係者の皆様にも心から感謝申し上げます。そして大変お忙しい中を本日の基調講演を快く引き受けて戴きました、独立行政法人の森林総合研究所の河合様、そして黒松林を守る為の活動について発表戴くためお隣山形県酒田市からお出で頂きました三沢様には心から御礼申しますと共にこの後どうぞ宜しくお願い致します。本日のフォーラムで御座いますけれども、これは国土交通省から支援頂きまして、環鳥海秋田山形県際間連携事業の一環として開催するので御座います、この連携事業につきましては鳥海山を中心とした古くから経済、文化、教育等の交流が盛んでありました山形、秋田両県の庄内、由利、最上、雄勝の四つの地域が県と言う行政区域を越えて、個一的な住民活動を行い、そして其れによって地域造り、あるいは地域の活性化を図ると言う、それと共に環鳥海地域の特性、魅力、そういったものの情報を発信していこう言う事で行うもので御座います。したがって本日のこのフォーラムを皮切りに致しまして、来月10月10日には山形県の遊佐町で川の恵をテーマに致しましたシンポジウム開催、そして翌11日には、新庄駅周辺におきまして四つの地域の伝統芸能の披露、特産品の販売など地域の特性を活かした地域交流史、イベントを行う予定になっておりますが、その後も観光のイベントとか色々ありますがそういった地域の特性を活かした、多彩な催しを予定しております。どうか本日おいでの皆様にはそちらの方にも足をお向け下されば幸いです。さて象潟町ですけれども今から315年前の元禄2年1689年6月16日から18日までの3日間、奥の細道で知られる俳師の松尾芭蕉が、弟子の空と共に船に乗りまして酒田を出発し、吹浦を經由、そして後に来たところで御座います。当時今もそうですけれども松島と並び賞される風光明媚な象潟町御座いますけれども、当日16日は朝には雨が降って来たようで御座います、松島と比べて松島は浦和の如く、象潟は浦和の如くと奥の細道にも書いて御座いますし、また象潟や雨に西施がねぶの花と言う、象潟の美しさを中国の大王が愛したと言う、西施と言う美人に準えまして歌った銘句を残しているところで御座います。本日のフォーラムはこの象潟町を始めとして海岸線に広がる松林を復活させ、郷土の美しい景色を守ろうと、そのための住民活動がどう有るべきかと言う事を模索しようと言う事で開催させて頂きました。手前味噌になりますけれども本庄由利地域海岸部分につきましては、強風や飛砂、高潮などから住民の生命財産を守ってきました。それだけではなくて人々の暮らしの中に潤いと安らぎも与えてくれたもので御座います。しかし残念ながら昭和57年にこの象潟町で始めて松喰虫の被害が確認されて以来、様々な対策を施して来た訳ですけれどもそれにもかかわらず、被害が非常に拡大して来ておりまして今日の状況になっている訳で御座います。これまで海岸林に付きましては人々が暮らしの中でそれを利用し、そして利用する事に寄って併用する事で生活の一部として存在したものでそれによって守られて来たものと考えておりますけれども、近年の生活の利便性を求めて海岸線ルートを使う事に由りまして、非常に松林に

ついて省みる事が少なくなりまして、それが荒廃の始まりでもあるのかなどその様に考えているところで御座います。従いまして海岸林、松林を復活させる為には地域住民の方々の協力が是非とも必要だと言うふう感じております。どうか地域の皆様宜しくお願ひしたいと存じます。そうした地域の協力を頂く為に由利地域振興局と致しましては、現在実施しております松喰虫の対策関連事業に加えまして、自主的な住民活動、住民の防御活動を一層の向上を目指しまして環鳥海白砂青松復活促進事業と言うものを行っておりまして、昨年9月には復活プロジェクト推進協議会と言うものを設立として、地域住民が一体となって、防除の活動が出来るような体制、環境作りに勤めている他、海岸林の保全に対する意思の復旧・啓発に努め、さらにはそうした活動をご支援する為に積極的に努めているところで御座います。そうした事業の一環として6月に引き続きまして来週10月3日になりますけれども、日曜日ですが、海岸林を守る為の一斉行動と言うものをこの象潟町や本荘市などで行うとしておりますので、どうか皆様にはご参加頂ければ非常に有難いなと言うふう思うところで御座います。終りになりますけれども、本日のフォーラムを継起と致しまして、海岸林は地域の皆様の貴重なかけがえの無い財産であると言うことを再認識して頂きますと共に、由利庄内両地域が一層連携交流を深める事によりまして、海岸林の保全の為の活動を活発化して、そして日本の現美景と言うべきこの海岸の美しさを取り戻す為に、黒松林の復活が着実に図られるようその事を期待しましてご挨拶とさせていただきます。本日は宜しくお願ひ致します。

#### 司会

有難う御座いました。続きまして開催地で在ります象潟町横山助役よりご挨拶申し上げます。

#### 横山

本日は山と海と遺跡の町、象潟町にお出で下さいまして有難う御座います。心から歓迎を申し上げます。本来でありますれば町長が皆様にご挨拶申し上げますところで御座いましたが、台風15号等の災害支援要請部が今状況中で御座います。代わって助役の横山がご挨拶申し上げます。さて環鳥海白砂青松復活プロジェクトフォーラムが同町で開催されます事は、昭和57年に秋田県で初めて松喰虫被害が確認されて本日まで終わりの無い戦いを続けて来ました本町にとりまして、誠に意味深いものであり、心から歓迎を申し上げたいと思います。言うまでも無く松の緑は国民の共通の財産とある共に、平安の時代から歌枕の地として知られて降ります象潟町に取りましては、大きなそしてかけがえの無い文化遺産であります。我々の日々の活動の中で松の緑を守ろうとする時、国土保全の問題、或いは地球環境の問題など大きなテーマに突き当たる訳で御座いますが、今回はまず庄内と由利地域の活動団体が松林の保全対策と言う共通のテーマを素に、交流連携の輪を広め、自主的な連携活動が行われまます事に付きましては、心から敬意を評するものでありますと同時に、その成果に大きな期待を寄せるもので在ります。象潟町でもこれまで昭和58年から松喰虫対策を投じて降ります。被害木、ざっと本数は22,600本程になっております。そうした費用は保全の費用も当然入っている訳ですが、六億二千五百万位かと思いますが巨額の費用を投じても終りの無い戦いで御座います。皆さんのお力を尚お借りしながら、この松林を守って言うふうにご考慮して御座います。終りに成りますがこの地域連携の輪が松林保全対策に止まらず、各班に渡り広がります環鳥海の発展に供されますよう、また今回のフォーラムが盛大に、そして有意義に行われますよう非常に良いもので有ります様ご祈念申し上げ歓迎のご挨拶と致します。

#### 司会

有難う御座いました。それでは早速ですが基調講演に移ら指せて頂きます。基調講演白砂青松海岸林のルーツと働きと題しまして、独立行政法人森林総合研究所気象環境研究領域長でおられます河合英二様にお願ひ致します。河合様は海岸林の防災機能、表層崩壊と災害発生基準雨量を主な研究テーマをして居られます。本日は茨城県つくば市よりお越し頂きました。それでは河合様お願ひ致します。

#### 河合氏

河合です宜しくお願い致します。本日、私を呼んで頂きましてどうも有難う御座います。今日の題名はここにありますが海岸林とルーツの働きと言うテーマ何ですけれども、どういう皆さんが集まるかとも私は分からなかったのと言うのと、行ってから話の内容を決めようかなと言う事で色々図表を用意して来ましたが、時々その図表を探してつかえるかも知れませんが一つ宜しくお願い致します。私の肩書きはですね、気象環境と言う事なものですから、ちょっと普段はですね細かい仕事をしていますし一般向きのですね、その会とあんまり一般の人にはですね馴染が



いと言うか面白くない話が多いですね。私は行政の方には時々色々な話はするんですけども、自分の話をするとですね行政の方でも退屈してですね、すぐ出てしまおうですね。それで今日は少し自分の専門外の色んな、私ある意味で全国の海岸とかですね色々な社会的問題とか見て来ましたので、そちらの方の話をしたいと思います。それから今日は本荘の方をずっと見て来ましたが、松の大線樹はあれは凄い物ですから、あれをどうやって最初に見付けたかと言うエピソードですねちょっと紹介して見たいと言うふうに思っています。話があちこち飛ぶかも知れませんが、一つ1時間宜しくお願い致します。私は言うならば山の町で生まれた者ですから、海と言うものを殆ど見たことが無いですね、ですから小学校5、6年頃位の時に初めて海水浴に行くと海と言うものは非常に綺麗な物だと思って感心したんですけども、実は父は亡くなってますけど明治の生まれで最初に学校の先生だったんですけど、最初に行った所がですね、旧中学の教員で昭和5年から7年、先生をやっています、その時にアルバムも今は残って無いんですけども、やっぱり生徒達ですね海水浴、海岸で写真にみんなで写っているですね。父は能代の80年前の海岸と砂丘を一応見ているんですね。秋田は私にとっては非常に父の故郷の一つと言うふうに考えている訳です。今日はねどんな話をしようかなと、全部話する訳では無いんですけども、東北の松林と言うのはどこから来たのかなと言う事と、それから松の害虫病の問題ですね、それからこの二つは私の専門外なのであんまり面白くないものもあって、海岸林の開発利用と裁判と言う様な、私宮崎の一場と言う所がリゾート開発あったんですけども、住民がですね保安林の解除差し止め訴訟と言うものをやりましてね、私はその時宮町の職員だったものですから裁判の証人にちょっと行ってですね、結構ある意味では興味あるものですからその辺の話もちょっと皆様してみたいと思っています。まず最初にですね、ちょっと考えて見て下さい。松原はいいんですけど日本三大砂丘と言うのは何所と何所と何所だと思いませんかと言う、ちょっと頭に浮かべて見て下さい。私はね勝手に鹿児島に吹上って言う大きな砂丘がありますね。それから鳥取砂丘、庄内砂丘この三つだと思っていたんです。ところが静岡の砂丘を見に行ったんですね石碑が立ってまして、ここが三大砂丘の一つだと言われていると言うふうにしてあるから、私の認識がちょっと違うのかなと言う事でちょっと調べてみたんですね、そうしたら三大砂丘と言うものが結構ありましてですね、色々な説があるのかな、千葉の九十九里浜、鳥取砂丘、静岡の砂丘、鹿児島吹上浜砂丘言うなインターネットで調べたらこう言うのが出て来たんです。庄内砂丘が入って無いかと色々更に検索したらですね、メロンの所にですね、日本の三大砂丘の一つだと言うふうにして紹介していますから、結局三大砂丘と言うものは五つあったと言う事で、面白いなと、三大と言うのは日本には三つと言うのがどうも好きらしいですね、三つの何とか三大何とかやっぱり五つあると言う事はそれぞれ地元の人達がですね、砂丘なり海岸に非常に愛着を持っているとそう言う事で五つあるのかなと言う事でなかなか面白くてこれを最初に紹介して見た訳です。次にですね、今日ちょっと松の害虫状況の所を見て来たんですが、なかなか私の専門で無いんですけども非常に大きな問題がですね、私丁度1970年代に森林総研今の研究所に入ったんですけどやはり南の方でですねかなり問題があった何故流行るのかなと言う事で研究者が皆ですねそれこそ原因究明に当たってたんですね。結局色々な方達が研究してましてどうも分からなかったんですね。それで九州に清原博士と言う人がいて、ザイの中にですねセン虫と言うものがいると前から

分かっていたんです。それはね研究の対象に皆ほとんどしていなかったんです。それはザイセンチュウと言うのはその時までですはね、そういう木に害を及ぼすとは皆思っていなかったんです。でもですね中々原因が分からないものですから清原さんがある時セン虫ですね、木に摂取してみたんです、つけて見たんです。そしたら何日か経ってからですね見事に枯れたんですよ。それでこの松のザイセンチュウと言うものが始めて日本でですね発見されて、松に害を及ぼすものと言う事が初めて分かったんです。それで清原さんと間宮さんと言う二人がですね、学会で発表して海外にもですね新しい虫を発見しましたと言って、その登録を使用としたんです、そうしたらアメリカでですね既にこの虫は松のザイセンチュウと言う名前は同じものと登録されていますと、言うことが分かったんです。その時初めてですね、このザイセンチュウがアメリカから来たものだと言う事が初めて分かりまして、じゃそのいったい何所から来たのかと話しがもう一度持ち上がって来たんです。結局そのアメリカから来たですね丸太に付いてどうも入って来た様だと、それでどうも九州に最初に入って来てですね長崎或いはその鹿児島辺りからですね、段々北上して行くと言う事で当時はですね、まさか東北、ここまで来るとは思って無かったと言う、こちらの方には殆んど被害が無かったですね、ですから私が入った頃は40年代ですからまだこの位の所、段々段々と北上して行く、最初はですねマダラカミキリもそんなに北へ行かないかなと話が最初はあったんですが、どうもどんどんと北へ向かって虫もですねやっぱり枯れると次の餌が無いから、どんどんと広がって行くと言う拡張して行こうとしますからね、有る所有する所と言うふうに向かって行こうと、ですから段々北へ昇って来たと。これはエイズ型と言うのはですね東大の西口先生が付けて居るんですけども、要するに今まで日本に無い病気だから、とてもそれに対する対策が取れない。だから特効薬も無いと言う事で、エイズ型と言う事で、こう言うふうな名前を付けてですね、それでここで外国から来たのかと言う事が大体分かるかと思うんですけども、その為ですね今皆さんも分かっているとおり、抵抗性松と言う事で抵抗性松のですね創生と言うので、彼方此方で作っているんですね。も一つやはり松だけでは無理かと言う事で広葉樹何かもうちょっと苗木を植えてやろうかなとそんな風な事を考えておる訳で、秋田県もですね広葉樹導入色々やっています。北海道が松があまり育たないものですから、柏とか水楢何かを植えたりしているんですけども、大事に育てて植えた方がいいと言うな事を提案してます。今この様な事も広葉樹を導入する場合はですね、必要な知識かなと思っています。実はですね合成松言うのはですね、強い松同士をを掛け合わせて最後にザイセンチュウを摂取してどれ位枯れるかと言うな事で、一般のものよりかなり強いものと言う事で、これは九州の方で選抜試験の時の結果何ですけども、80%、平均して75%位は生存したと言う事で、一般の松が30に対して80だからかなり抵抗性があると言う事でこう言う事業をやっている訳です。ところが九州で選抜した物は九州の地区では使えるんですけども、事業としては他の地区に持って行けないんですね。これは種苗法とか色々、ですからここで抵抗性松を植えたいと言ってもですね、東北地域で開発物で無いといけないと言う事で、段々彼方此方で抵抗性松開発されていれてます。でも松と言うものはなかなか新しいですね異例的な係数を持つ範囲が非常に狭いらしいんですね、ですから中々これはと言うものが、いわゆる他の樹脂より出しにくいと言うふうな事ちょっとあるんです。それから一つ最近そういう研究者の人達と昨年度ですね会議があったんですけども、その中で一人の研究者がですねどうも実験室でですね十分な環境条件で育てて抵抗性を決定してるんだけど、実際現場に行くとならね必ずしもその強いと思われた方がより強いと言うと、どうもそうでは無いらしいと、もうちょっとこの辺をですね詰めて見なければならぬと。要するに実験室ですから水分もですね栄養分も十分にやってですね、その状態で摂取しますね、所が現場言うのはかなり厳しい条件下であって、所謂ストレス幾つか見つかっておりますけれども乾燥のストレスとか、温度のストレスとかね。そう言うような所で植えるものですから、必ずしも実験室の順位のようにはどうも無いと言う様な事がちょっとありまして、一つ我々サイドから言うところちょっと詰めて置く必要があると言うふうを考えています。もう一つはですね、エイズ型ですからなかなか日本の松はですね、そういう抵抗性を持って無いんですけどね。ですから抵抗性の松は創設事業やっているんですけども、自然から言うとその次の子孫がですね、親よりももうちょっと抵抗性が強い木になるだろうと、要するに強い木が残るだろうと、更にそれに由って子孫はもうちょっと強いケース

の木が出来るだろうと言う事で、やはり自然の天然方式を促して行くと言う事は必要なのかなと。ただ非常に長い年月がかかるので何時これが成功するかと言う事は、我々研究者も含めてですね、それはまあ分からないですね。ただ有る程度天然交森林を繰り返す事によって自然の抵抗性ですね、徐々に受け継いでいけば、このエイズ型の病気はですね中々防ぐ事は難しいかと。今も抵抗性はどの位成功するかと言う事はまだ始まったばかりですね、ちょっと分から無い状態かなと、私は感じているんです。



皆さん大体こう言う話はお分かりになっていると思うですけども、松林が衰退したのはですね、いわゆる昭和 30 年以降の燃料革命、肥料革命ですね、松葉もですね、枝葉もですね、燃料とか肥料とかに使ってたんですね。ですから松林と言うのは非常に綺麗な状態で整備されて、栄養分がですね、あまり溜まらないような仕組みになってた訳です。これがですね、松に取っては良かった訳ですね。松も肥沃な所方が育つんですけども、他の木と共存した場合には、やはり他の木の方に負けてしまうと言う性質が有るものですから、どう

しても松葉とかやはり規定以下に抑えて置かないと、負けてしまうと言う事があります。ちょっと話が飛びまして、開発の問題をちょっと取り上げたいと思います。色んな意味で海岸林と言うのはですね、開発の対象になりやすいんですね、非常に面積があると言う事、ある意味で物質が入ってくるといえると言う事、そしてある意味所有者が限られていると言う事でどうしても開発の対象になりやすいと言う事で、かなり経済性優先ですねかなり開発され出来た訳です。色んな開発に対して基準思想が足りないとか批判がですね、これまでも多く見られてた訳です。その辺の事情はちょっと私もですねそう言う事を見聞きしたものですからちょっと気になっていました。これは全国の原子力発電所関係の施設が何所にあるかと言う事で、ここで見る限りはですね、かなり日本の海岸近くにですねある訳ですね。最初が確か東海村に始まったんだと思んですけども、それから全国に彼方此方にあると。東北の日本海側はですね、これが無いと言うか、一つの研視としてそう言うものを入れ無いと言う考えだろうと私は考えて思っているんですけども、非常に何も無いと言うところでこう言う考えはいいかなと私は思っています。最近はですね今朝もちょっと見て来ましたが、電力の量としては大した量では無いんですけども、彼方此方やはり風をですね、逆に利用したその電力装置が彼方此方に段々出来て来まして、自然エネルギーを逆に利用しようと、風が強いと言う事を逆に利用しようと、こう言う考えで進んでまして、量としては大した量では無いんだけど、考え方としては非常に良いのかなと言うふうに考えております。開発と言いますものはですね、最初は増林して大きな工業団地を作ったりしてですね、そう言う事が非常に行われまして、最近では環境保全林としてそう言うものを保護して行こうと考え方に徐々に変わって来てる訳です。初期の頃の開発はどうだったかと言うのをちょっと紹介しますね。これは茨城県の鹿島工業団地のその前の状況ですね。一部この辺に港を掘ってありました。実は私が入った時の上司と言いますか室長がですね、ここの報告とか書いてあるんですけども、なるべく木を残さない、それから工場の周りには 30m 幅位の臨海をそのまま残さないと言う事を書いているんですけども、実際はこんな様な状態で殆んどですね、松が見えない。茨城県の臨部分もですね、私の上司の榎山からの報告を受けてですね、なるべく残して置いて下さいと言う様な事を開発当局に申し入れたんですけども、結局は経済優先と言う考えですね。支配的になったんですね。ですからほとんど消えてしまったと言う事です。これはちょっと珍しいんですけども、鳥取砂丘ですね、今の状態ですけども実を言うんですけどももうちょっとこの辺をですね植えて居たんです。ところが自然砂丘を守るべきだと言うか自然の砂丘の状態が無いと言う事で、取ってくれと言う要求が砂丘を守る人達と観光関係の人達からそう言う要望があったんですね。農業をやっている様な人達は反対したんですけども、結局はこう言う様な形で当時この辺の所をですね、かなり植えてたものを取ったと言う事で、非常に珍しいんですけども、こう言う考え方も一つとしてあると言う事ですね。これが鹿児島島の吹上浜やっていたんですけども、実は碁盤

の目状にですね防風林帯を造成して農業的な農業をやっているんですけども、前の方もですね実はこの辺にみかんを植えていたんですけども、伊勢湾台風が来てですねほとんど全滅してしまったと言う事で、今はそこを含む公園緑地として再開発と言いましょうかこんな形で利用した訳です。最後の写真ですけども、宮崎の一場と言う海岸なんです。これはですね昔からあるゴルフ場なんです。この横にですね、いわゆるリゾート法によるリゾート開発と言う案研がありまして、それで開発した訳ですけども、私もその時九州居たもんですから、アセスメント関係で風を計ったりですね、塩風の中の塩分を計ったり、それから葉っぱに付いた塩分の量を測ったんです。後で写真、図表を見せますけれども、その結果ですね、こう言った所の状態とこう言った所の状態で建てたとしても、環境としては殆んど差が無いと言う事が計った結果分かりましたんで、その様な開発の仕方ですね、問題は無いと言うふうな報告をした訳です。ところがですね実はこの辺にですね、市営住宅があって割とお年寄りの方達が沢山入っていたんですけども、市はその退去を命じてそこに施設を作るので退去を命じたんですね。それで皆が困りましてその中のリーダー的な人が中心になって、国にですね、保安人解除の差し止め訴訟と言うものを行ったんですね。それで私は当時関わった者ですから、証人として国側の証言をしてくれないかと言う事で証言をしたんですけども、開発と言うものはこう言う開発です。一応ですねこの開発の林帯の伐採図と言うのはですね、30%以下なんです。ここから一番遠いとこまでは1,000m以上有るのかな。最前線側がですね、200m位残しているんですけども、私としてはですね、先ほどこちょっと鹿島ですね大工業団地の写真を見せたとするんですけども、ああ言う開発から比べれば随分補佐的なものは十分かなと思って一応そう言う報告を出したんですけども、裁判で証人という事がありまして、訴状と言うのを見たらですね、住民の方達が普段そこを散歩してたのに囲われる事によって散歩が出来なくなるという事とかですね、洗濯物が乾かないとか自転車か錆びるとかそんなある意味では素朴な疑問点が訴状に書かれていまして、そう言うものは裁判でなくてもですね、専門家がもうちょっと説明すればいいけれども裁判になったからしょうが無いと言う事で行ったんですけども、丁度その裁判中にですね、北海道の奥尻で地震津波がありまして非常に大きな災害だったんですけども、弁護士側は訴状を無視して、こう言う開発をすると津波災害に非常に問題だと言う事に論点を変えて来まして、その辺を一番向こう側が主張した論点なんです。結局裁判は国が勝つ事は勝ったんですけども、その時の新聞記事がこんな様な感じなんですけども、ちょっと小さいので後ろの方には見えないかも知れませんが、原告側はですね、乱開発される事に歯止めを掛けたいとの思いがあったと言うふうに書いてますね。それから宇都宮大学の藤原先生は、この関係は実は行政との結びつきが強いと客観性や正当性に欠けたと批判、一応新聞記者がそう言う批判をしていますね。住民の方ですね、この辺ちょっとあるんですけども、赤い位置の所にあるんですけども、立退きを迫る人、それを拒否する老人達のパイプ役となって、何と言いましょうか、そう言う様な事を阻止したかったと言う事なんです。たぶんもうちょっと市側がですね、そう言う人達をもうちょっと集団的な場所に移すとかですね、そんな事をすればどうだったかなとちょっと考えるんですけども、なかなか開発とですね海岸線を守ると言う問題は非常に難しいと言えば難しい問題かなと思います。私としてはこの程度の開発だとある意味そんなに無茶な開発では無いのかなと言う様な立場だったんですけども、結構訴訟と言う事実はですねちょっとショックではありましたね。ちょっと私の考え方をまとめてあるんですけども、ちょっと小さく場が広がって見にくいと思うんですけども、これね成長期にはですね経済性優先と言う事でああ言う開発があったんですけども、段々皆さんの考え方がですね、海岸線を環境保全林として活用、利用すると言う様な考え方に皆がなって来たのがこの裁判の一つの問題点と言うか、社会的条件の変化かなと思います。やっぱり住民側と十分な対応を持つ必要がその当時あったのではないかなと。いざ私もその委員会に会ってですね住民代表と言う方もいた訳なんですけども、若干その辺の議論なんかはですね、今から考えるとクローズされていたかなと。これからのその色んなものはですねもうちょっとそのオープンな形にすると言う事が非常に、この裁判は大分前の話なんですけども重要な事だと私はその当時思いました。やっぱりその住民側にあまりクローズにするとやはり後からですね、色んな問題がどうも出て来るんじゃないかと思いました。最後にですね裁判長がですね地震津波に対するアセスメントをやって無かったと言

うふうな指摘をされたんですけども、私の気持ちとしてはですね、そういう地震津波のアセスメントちゅうのは実測不可能じゃ無い  
かと言う事は率直に思いましたね。その後阪神大震災の災害があった時、あれに対してですね、構造的にも色んな面でも、災害  
に絶対大丈夫な様な町作りとか、そういう施設作りと言うのはほんとに出来るかなと言うふうな事その時はねちょっと私は思いま  
しね。裁判長はそういうアセスメントがやって無いと言うな事をその中で述べてはいたんですけども、ちょっと私は少しその辺が  
納得できは無かったですね。これですね、静岡でやった海岸林にですね、どう言うふうな機能を期待するか、役に立つ機能は何  
かと言うな事をアンケートを取ったんですね。上の1から4までは、いわゆる従来から言われている海岸林の防災機能的ですね、  
塩害・強風から防ぐと、9番除いて10から13位まではいわゆる環境林、教育林と言う様な形の機能ですね。段々防災林的な機  
能も相変わらず多いですけども、そういう環境林、社会教育林的な機能をですね、海岸林には期待される時代にですね、段々な  
って来たと言う事も事実だと思いますね。これは一番最後に話をしようと思って最初に持って来たんで最後に入るんですけども、  
今言った様に海岸林がですね段々環境保全林になったと言うな事、必要になったと、これからはですね、ボランティア活動とか、  
子供時代の植栽体験とか、野外コンサートとか、能の舞台と書いたのはちょっと能の舞台が松に関係あるのがちょっと書いたん  
ですが、こう言ったものが今後必要かなと思ってたんですけども、先程後から講演される三沢様の話をしたらですね、三沢様  
の所ですすでにそういう様な活動をですね、活発にやっていると言う事で非常に感心したと言いましょかね、非常に全国の例  
の無い様な活動じゃないかと言うふう感じた訳です。能と言ったのはですね、有名な作家のですね司馬遼太郎がですね、日本  
の松の事を書いたんですけどもその中でですね、日本人は昔から松を非常に大切にしているんだと言う話がありました。その中  
に能の舞台ですね必ず松の背景があって、それから松の枝をですねそこに刺して本物の松の枝を刺したりして舞台を飾るんだ  
そうですね。私もそういうもんかとなと思って本屋に行ってですね、図書館へ行ってちょっと能の舞台を写真をちょっと借りて来た  
んですけど、ちょっと暗いんですけども立派なですね松が描かれているんですね、もし興味がありましたら能の舞台なんかをですね、  
ちょっとご覧になるかどうかと思います。私も環境林と言いましたけども、音楽会とかですね、ああいう松を背景にしてですね、実  
際の松を後ろにした能なんかをですねやって見たら一つ面白いかなとちょっと感じたもんですから、こう言う写真をですねちょっと  
紹介したと言うふうなんですけども、私の時間は後何分までですかちょっと遅やったから後25分位ありますかね。後15分ですね。  
次にですね海岸林のルーツと言いましょかね、東北地区の海岸林は何所から来たかと言う事なんですけども、実は林さん言う人  
が東北の松林のかなり天然分布言う事で図に表しているんですね。ところが佐藤さん言う人がそれに対してあれは天然林じゃ無  
くて、他の所から輸入されて来たもんじゃないかと言うふうな事を言っている書物をちょっと見た事があるんです。それで林さんが  
出した図言うのはこう言う図だったですね。これは本にもなっているんですけども、こう言うふうにはですねこの辺は天然林分  
布しているんだよと言うような事なんですけども、私は若干これにちょっと疑問を持ったりしたもんですから佐藤さんがそう言  
う論文を書いたのでどう言う事を言ってるかと言いますと、要するに誤解であると、それは何所から運んで来たもんで天然下種更  
新もどんどん進んでいるから、如何にも天然林の様に見えたからそう誤解されたんじゃないかと言うな事を言ってる訳です。植林  
として史実で最も古いのは静岡県と言う事があるんですけども、佐藤さんはですねそれらとか色々な事を通してこんな様な事を  
言っているんですね。仙台地方はですね静岡県浜松から種子を取り寄せたと言う指示する説があると、それから岩手県高田松  
原はその木かどうか分からないですけども、仙台から仙台藩の船によって植林した訳ですね。青森は津軽藩で山形酒田はです  
ね、本間さんがですねやっぱり能登からですね輸入したと言うような事。それから秋田県の本荘も宮城県釜石から種子を求め  
て導入したと言う事が書いてあるんですね。佐藤さんはそれでそういう事を総合緩和するとですね、東北の松林が2つ位のルー  
トと能登の方から来たルートと静岡の方から来たルート、こう言う2つのルートがあるんじゃないかと言うふうな事をまあ言っ  
てる訳です。それで私もその後もちょっとそれに何か類する物は無いかとちょっと見てみたんですけども、これは川田勝さんって非常  
に海岸林の實りで有名な方なんですけども、茨城の東海村とか千葉の海岸林を促成した人なんですけども、その人の書物には

ですね、やはり東北にはですね天然林の分布は考えて無かった様ですね、1と2は黒松天然林広葉樹です。それから黒松天然林赤松が入っているのはやはり南の方だと、どうしても北の方には無いじゃないかと言う様な主張ですね。この辺は私も専門家じゃ無いからどうだかちょっと分からないですけど、ちょっと興味がある事ですね。ちょっとその辺の事をこちらの専門の人に聞いたらDNA鑑定とかそういうのをやればですね、天然林と植えた物は多分明らかに違う様な系列言うか、植えた物なら非常に似かよった系列として出て来るかな、DNA鑑定なんかやればもしかしたらそういう事が分かるかも知れないと言う様な事を言われまして、こう言うのも一つ興味がはっきり言えばある話だなとその時思った訳です。後もう一つ、やっぱりどうも黒松は暖かい地方の物なんだと思うのはここでも結構可視更新してるんですけども、鳥取砂丘の海岸ですけど、かなりですねかなり無数って言うんですか非常に多くの松林が更新して、自然状態で更新しているんですね。こちらやっぱり同じく九州の吹上浜の海岸何ですけども、丁度ここは松のガイセンチュウにやられてポッカー穴が開いた所なんですけども、そこでもかなりですね松がですね天然更新したんですね。こちらでももちろんあるんですけども遠くの方に来られると南方がもっとですね、天然更新が勢いが強いと言うふうな事が感じますね。ですから松は暖海ですね、暖かい方を起源にしているんじゃないかと言うふうには私を感じている訳です。色んな問題があるんですけども、海岸林はですね最近では自然の物が随分無くなって来まして海岸線沿いですね、コンクリートなんかで被われる、これは伊勢湾台風が来てですねやはり津波災害が歴然だったんですねそれで国家としてはそう様な防ぐ為にこう言うコンクリートで被うと言うな事をしてるんですけども、そこに一つか二つ問題は出て来るかなと言うふうには思っています。これはですねやはり屋久島ですけども、海亀が来てですね、コンクリートに阻まれて又産卵しないで帰って行ったと言うな事が一つ言われている訳ですね。それから直接護岸じゃ無いんですけども、こちらが海でこちら護岸元々あったんですけども、ここが溜池ですねここに矢板を打ってですね水が入って来ない出入り出来ない様にしたんですね、ここに松林が有ったんですけども、これやっぱり福島の場合なんですけどもかなり過湿が原因と見られる様な事で枯れてしまう、衰退してしまっている訳です。これは一つはたぶんと言うコンクリートとか矢板とか言う物が、水の動きをですね、かなり制限すると言うな事があるんだろうと思います。護岸湖と言うのはそれなりの機能は果たしているんですけども、あまりその地中の水の動きとか言う事は今までは考慮に入れて無いんじゃないかと言う様な事で、やはりこう言う物を入れるとですね、地下水が上がって、やはり根の方にかなりダメージを受ける可能性が強いな、やっぱりこの辺は今後お互い話し合ってますね、こう言うふうな考慮に入れた工事がやっぱり必要じゃないかと言うふうには考えています。これはと言う保安工のある一つなんですけども、これは静岡なんですけれどもですね非常に大きなですね護岸を作る訳ですね。津波が来たもんですからやっぱり木では防げないと言う事でこう言う事をする訳ですね、海側にそうするとやっぱり水もある程度制限されてやっぱり過湿と言う問題がどうしても従来から比べるとどうしても出て来て、根がやられるケース多いんじゃないかと言うふうには考えています。もう一つ今大変厄介なのはですね、二千箇所あるんですね。これはその戦後ですねニセアカシヤがですね、空調地層を固定して養分を松にですね、与えると言う事で混植を肥料物で混植したんですね。実はそのガイセンチュウとか言うのが無い時代はですね、ニセアカシヤは黒松の下で細々と生きていたんです。ところがガイセンチュウがおって松が枯れますとですね、光条件が非常に良くなるんですね、それと従来は海岸砂丘はあまり栄養分が無かった言う事があったんですけども、植えてからもう戦後80年以上も経ちますとですね、かなり栄養分も途中で溜まって来たと、最近落葉も固まら無くなったと言う事で、結局そのニセアカシヤにとって非常に条件の良い形になって来たんですね。でもう一気に反応しまして、色々今薬を使うと言う事は批判的ではあるんですけども、薬で言う鉤を入れてやると言う方法が一応提案されてはいるんですね。やっぱり一般の人が入る所、それからきのこ取りとかに利用しますよね。ですからやはり薬を使うと言う事は批判だし、危ないと言うものもあると思うんですけども、低毒性と言えどもやっぱりきのこ取りと考えるとちょっと難しいなど。さりとて、何か良い方法があるかと言うとなかなかこれが無いんですね。山に植えるんですね、ある程度自己間引きがあつてですね、徐々に減って行くんですね。ところが海岸松と言うのは自己間引きだけでは減らないんですね。これは千葉県の尾羽



山地とかでやっているんですけども、要するに山の減る率に比べると海岸の松はですね2、3 倍も残っていると言う事で、段々過密になって来まして過密になるとどうなるかと言うと、葉っぱがですね上の方だけちょっと樹幹言うんですけど、その部分小さな非常に細いそう言う木が、状態になってしまうんですね。ですからこれが今非常に今問題で間伐したり、色々対策をしているんですけども、どうしても松はですね枝の防御力が無いものですから、一旦枯れたものをですね間伐したからと枝が出て来る訳でも無いものから、なかなかその辺が早期に昔保安林と言う者は余手を付けないと言う考え方だったものから、ちょっと手遅れ部分と言うものは随分ありましてですね、その辺が非常に問題かなと思います。結局その松の下にねちょっと生えてはいるんですけども、松は光を非常に要求する木ですね、陽樹だもんですから、光が無いと中々育たないと言う事で、大体その相対照度言うのは何も無いところの光の強さを 100 として、木の下でどの位あるかと言う事で測るんですけど、30%以上無いと苗木は地上に生えてこない、ただその状態でほっといても多分大きくならないだろうと、こちらの専門の人に聞くとやっぱりその 60%位無いとちょっと大きくなるのは難しいなと言う事なんでしょうね。そうすると 60%と言うのはかなり疎林状態になる訳です。ですからそれですねやると機能的なものと色んなもんが問題になるんですね。これちょっと黒松林に付いてのこう言うパップデータでなかなか無いんですけども、赤松林でですねこう言う相対照度測ったのあるんですけども、40%だとですね相対照度40%だとhaあたり300本もいかない位だし、60%にすると言うとかかなり疎林になってしまうので、これも非常に難しいなと。ですから海岸林を更新するにはですね、带状に切ってその帯の間を更新すると言う事が必要かなと思いますね。これは吹上浜の天然更新ですけども、母樹がありますね。ある程度砂丘の落葉さが薄かったり、表面に土壌が出てますと、母樹から落ちた木がですね自然に生えてきますね。光条件さえ良ければ非常に生えて来ますね。ところが手入れをしていないとですね、この下が雑木と雑草が生えてきちゃって落ちても生えて来ない、その辺の手入れをきちんとする必要があるのかなと言うふうに考えている訳です。大体もう最後時間が来てしまって、終わらないといけないんですが、これ何かと言いますと落葉落種がですねあまり厚く堆積していると稚樹が出ないよとそう言う話ですね。ですから2cm 落葉落種が2cm 位の所でmあたり40本位と言うんですけども、それが6cm とかなるともう出て来ないと。これは一つは水分の問題、根がですね張っても地面まで中々到達し無いと言う問題と、他の菌に稚樹がやられてしまうと言う問題があると言う事で、やっぱり松の為にはですねある程度落葉落種は掃除した方が良く、無い方が良くと言う考えですね。これは私と同じ所にいる太尾田と言う者が書いた図なんですけども、松から松に更新して行く為にはちょっと見えませんが落葉落種を掃除して、母樹を残してですねやがて黒松の天然林にしたらどうか。それから黒松を広葉樹にしたい場合は落葉落種をそのまま残して、やがて栄養分が十分溜まった状態で広葉にしたらどうかと言う様な事ですね。多分海岸林の場合はですね、前線側は松に代わる物は無い様ですから、中々難しいですね広葉樹を入れるのは、ですから前線側は松から松でと言う事で落葉をかいてですね、なるべく黒松の良い環境を整えて行くと。ちょっと広ければ内陸側はですね、少し松から広葉樹と言う事も選択肢の一つとして選んじゃ良いかと言うふうに考えています。あまりまとまった話じゃ無いんですけども丁度時間になりましたので、私の話はこれで終わらせて頂きます。どうも有難う御座いました。

#### 司会

どうも有り難う御座いました。河合様のプロフィールに付きましては、入場の際にお配りしましたチラシで、ご紹介しておりますのでそちらをご覧ください。それではここで10分程休憩に入りたいと思います。次は14時30分から由利庄内各地域の活動団体の発表を行います。

#### 「本荘由利地域の海岸林の現状と地域活動づくり」

#### 司会

まず始めに、由利地域活動団体活動報告と、秋田県由利地域振興局、農林部、森づくり推進課、土田信次様より「本荘由利地

域の海岸林の現状と地域活動づくり」と題しまして、発表して行きたいと思います。それでは宜しくお願いします。

## 土田

土田と申します。昨日の夜ですけれども、河合先生とちょっと一杯やりながら、色々な素敵な話をしまして、その時点で先生の方からは、前振りはどうやって人を惹きつけるかが、それが大切なんだよと言う様な話がありまして、かなりプレッシャーを受けています。それでまあ酒を飲んでしまうと、やはり行き着く所まで行き着くって言うか、明日は明日の風が吹くだろうと言う先生の言葉もありまして、昨日結構やってしまったんで、途中でかんだり、とちるかも知れませんが、それはご了承して頂きたいと思います。今日は画像を中心



として、過去から現在、それから未来と引き継いで行くかと言う内容で、お話を進めたいと思います。舞台の袖の方に下がらせて頂きます。本荘由利地域の海岸に広がります松林は、飛砂や高潮に苦しむ先人が苦難の末に作り上げたものです。まずは海岸林を作り上げた先人の偉業から紐解いて参りたいと思います。藩政期の海岸林調整は、篤志家と藩の時代がありました。本荘市石脇の肝煎であり資産家であった石川善兵衛は、3代80年に渡り現在の石脇地区に、250万本もの黒松を植林しました。佐々木元右衛門は同志15名と本荘市出戸地区水林に20町歩の植林をしました。これは現在の水沢の国有林となっております。また西目町潟保の富豪百姓の佐藤重左衛門は、西目潟の干拓の為30町歩の植林をしました。本荘藩は耕作地や住宅を守る為や開田対象地の拡大、または城下への交通の為に広域的な対応をしました。このような広域的な活動・対応は秋田藩では見られなくて、本荘藩が得意の物だったそうです。この中で特に石川善兵衛は、北国街道として交通の要所であり、村人の生活の場でありながら、荒涼たる砂原の石脇地区の植林事業に立ち向かいました。石川は財産を植林活動につき込みながら、「私はこの事業を天職だと思っている。欲や得を考えたらやれる仕事ではない。世間がわしを気遣いだ、馬鹿だと言っていることも良く知っている。今わしの前に立ちはだかっているのは、あの魔物の様な飛び砂である。」と言った気概で石脇の砂漠に立ち向かいました。このような辛苦により石脇地区に松林が生息しました。これは70年ほど前の新山野園から撮った写真です。写真、いまポイントが動いている所が子吉川で、こちらが日本海側になります。そして現在に至るまで松林の中に小中学校が建ち、緑豊かな団地が形成されました。この部分が子吉川でこの辺が公園になると思います。続きまして明治、大正、昭和になりますと国、県、市町村が公共事業として海岸林を造成する時代になってきます。海岸林の造成、大正昭和期の写真でありますけれども、やはり人力に頼る、もっこで運んだりトロッコで運んだり、そういう様な形で海岸造成、海岸林の造成がされ、人手に頼るものであり多くの時間と経費を費やしました。これは造成地の続きの写真であります。この様に先人達の努力と苦難によって現在の白砂青松の海岸林が形成されました。本荘市田尻野海岸林は、これは国有林でやっております。それから上狐森、上浜の海岸林はこれは県営保安林でやっております。また本荘市の水林は、これは国有林でやりましたが、現在はこの松喰虫でこのような林は残っておりません。白砂青松の海岸林は、先祖が築き、守り引き継がれてきた貴重な財産ですが、先程先生も言われましたけれども、昭和40年代に入りますと住民の生活常識が変化し、特に薪炭からガスや石油の化石燃料でエネルギー需要が変化してきますと、海岸林から枯れ枝や落ち葉や雑木を焚き付けや薪として採取しなくなりました。その結果という訳ではなからうかと思いますが、松林の中に広葉樹が進入し植生も変化してきております。さらに昭和57年に象潟町で松喰虫が発見されてから、その被害は瞬間にかなり全域に広がって行きました。このようなことが複合的に重なり、人力管理が行き届かず、海岸林は衰退してきております。海岸林の衰退はすなわち、生活環境や景観の悪化、それから急激な環境の変化による二次被害

の拡大に繋がっています。現在の海岸林の衰退の様相ですが、これは松喰虫被害により白骨化した松林です。現在台風  
の被害にあい、かろうじて立ってた松も倒れまして、この荒涼とした様子を示すまでになった松林もあります。この様な状況に国、  
県、市町村の行政も手を打たなかった訳ではありません。様々な防除対策をしてきました。その一つが松喰虫のもととなる、松の  
マダラカミキリ駆除の為に枯れ松の除去治療です。松喰虫の被害を受けた木を切り倒しまして、枝葉を払い、この場合は移動チ  
ッパーでチップ化し、幹や枝ごと松喰虫の元となる松のマダラカミキリを駆除しております。またもう一つは、噴霧器やヘリコプ  
ターを使った薬剤散布事業も行っております。これは人力やあるいは噴霧器を用いました、だいたい6月頃、松のマダラカミキリが  
羽化する直前に薬剤を撒きまして、そのマダラカミキリを駆除すると言うものです。その他に景勝地や学校の重要な松には、樹  
幹注入剤を用いて被害から予防しております。色々な薬剤がありますけれども、こう言う様な薬、これを松の木に何本か打ちまし  
て、これを打ちますと松のザイセンチュウが繁殖し難いと言う事でやっております。この写真は象潟町の蛸満寺の前の公園の所  
で研修を兼ねてやっている所です。この他に被害地の再総林言う事で、植林や、整備事業もしております。また様々な防除方法



がありますが、まだ研究中とか、実験段階と言う物があります。こ  
れは適正に防除事業が実施されている所で、何本か被害木が見  
えますけれども、被害率が5%以上と言う所で、松喰虫被害から  
守られている状態です。この林郡は岩城町の烏ヶ森湖畔林の隣  
にあるJRの鉄道ですけれども、ここは殆んど被害の対策を取らな  
かったと言う事で被害率80%以上と言う甚大な被害となってお  
ります。この状況ですけれども、まだこの時点の写真では緑色の葉  
っぱとかがありますが、これはもう完璧に骸骨化しておりま  
して、この前の台風で相当倒れております。この様な対策を取っ

てきましたけれども、やはり昭和57年に松喰虫が発見されてから被害量はどんどんどんどん増えております。このグラフになっ  
ておりますのは、駆除量でありまして、実際の被害量はもっとあるだろうと測定されますし、平成10年辺りから横ばいになってお  
りますけれども、これはやはり予算の関係でこれだけしか駆除出来なかったと言う事になります。この様に行政が行う防除事業  
にもやはり限界があります。厳しい財政の中で、やはり予算が限られていると言う事と、それから調査やそう言う様な物に人手が  
掛かりすぎると、私共海岸林の調査と言うのが担当4名、4人でやっております。4人でこの海岸線70km以上ありますけれども、  
全てに目が届くかと言うとなれば届きません。また複雑な被害形態というものがあります。今年大丈夫だったとしても翌年に枯れ  
始める、年越し枯れなどそう言うものはちょっと発見出来ませんので、そう言うのが被害を拡大させていると考えられます。また  
一般の民家の庭木とか、そう言う被害とかが放置されており、そこから松くい、松のマダラカミキリが飛んで行ったりしている  
と言う事で、こう言うのが積み重なって被害が収まらないと言う事になっております。ですからそう言うものもありますので、やはり  
海岸林の衰退を抑止し守っていく為には行政と住民が一体となった活動促進が肝要なのではないでしょうか。そういう意味で昨  
年由利地域振興局では、地域住民参加の活動を促す為のステップ1として、海岸林機能の再認識して頂くと共に、住民レベルで  
どういった活動が考えてもらうシンポジウムを開催しました。この写真は昨年6月のシンポジウムの写真です。約300人が参加し  
ました。地域住民が海岸林に対する認識を深め、これは地域活動に参加するきっかけとして行ったものです。ステップ2として、  
このシンポジウムを契機に実際に住民ボランティアって何をすべきなのか、具体的な活動の実践のきっかけ作りの為に松林復  
活一斉行動を春、秋の2回実施しました。これが昨年の春の一斉行動の様子ですが、去年は春と夏合わせて、2回で、全部で5  
箇所位でやりましたけれども、述べ500人が参加しております。由利地域では様々なボランティア団体が活動しております。そう  
いった人達のネットワーク化、いわば情報交換の場が必要なんではないかと考えました。象潟町では観光の名所である九十九

島の松を守ろうと、九十九島の松を守る会が様々な活動をしております。また本荘市の緑を育てる市民の会では、植樹を中心とした活動をしております。そして昨年8月ですけれども、新たに本荘市石脇地区に緑を守る会が設立されました。またTDKの社友会では、金浦町の赤石海岸をフィールドにして、これは県有の保安ですけれども色々な活動をしております。この様な団体のその他の情報交換や連携を強化して行く為に、昨年9月25日ですけれども、白砂青松復活プロジェクト推進協議会と言うものも立ち上げました。こう言う団体を作っておきますと、お互いの情報交換の場と言う事もありますけれども、各方面から活動支援等が聞き出し易いと言う事もあります。単独のボランティア団体やられているとこは中々行政からも援助を受けにくいと言うお話もありましたので、こう言う形を作りました。協議会の方の役割の一つは、じっさい具体的な地域活動を実施すると言う事です。地域活動グループ、これから設立されると言う所幾つかあると思いますけど、そう言う動きがあった時は助言すると。それから積極的に自分達が守りたい松林って言うものを決めてもらって、関与して頂きたいと言う事と、それからボランティア団体作ったとしても、松喰虫被害のボランティア活動って何やったらいいんだと言う事で、分かんない方が多いと思いますので、継続して一斉防除等やって、そのボランティア活動を通して企画・実行する事としております。協議会では、地域活動出来る海岸林を健全する事にはどんな事があるかと言う事を考えてみました。その一つは、公共事業とかでやります伐倒駆除事業を実施した時に、どうしても枝が飛び散ります。現場の方でも丹念に集めて整理してありますが、見落とす事があります。直径2cm位の枝まで松のマダラカミキリの幼虫が入っておりまして、そう言う物を残しておきますと、被害を広げる結果となりますので、この写真のように伐倒駆除が終わって、ある程度整理された後、活動しているグループの人が一回見回って、枝や残された幹を拾い集め、駆除すると言う事でかなり大きな効果が期待出来るのではないかとする事で活動している訳です。もう一つは、先程の先生の話がありましたけれども、ニセアカシアの駆除と言う事です。ニセアカシアはやっぱり育っていくとテリトリーを作りまして、他の植物の進入を妨げます。大きくなると太陽光を遮りまして、黒松を弱らせます。何も木が生えてないよりも、ニセアカシアでも生えている方がましだと思いますけれども、冬には葉っぱを落として防風とか、飛砂の防林効果は少ないし、根が浅い為に、かなり大きく成長しますと倒れてしまいます。強風で、一番問題って言うのが、刺があるのでちょっと入りにくい、そう言う様な森林になってしまうと言う事で、その駆除をやっております。この写真が報告ですけれども、だいたい松林の下に生えてきます。この辺で4、5m位になってきております。かなりの大きさになってきております。この様に刈り払ってもやっぱりおがりとか強いので、1年で1m位は成長してしまいますので、毎年刈り払う必要があると言う事が話し合われました。それから三つ目になりますけれども、厚く堆積した落ち葉とかを掻き取りまして、松の種子が発芽し光景の松が育つようにします。そうしないと松が自然崩壊しやすい環境になります。それともう一つは被害跡地への新植とか植栽です。そのまま放置しておきますと、草地からすぐニセアカシアが入り込み、その後の森林管理が大変になってしまって、松喰虫被害と言う大きな駆除が入ったら、植栽すると言うような形を取ればベターなんではないかと言うような話も出まして、これが金浦町の湖畔林で昨年の一斉行動の時の新植した時ですけれども、被害木を切って、まだニセアカシアが入って来る前の所でしたけども、そこに松の新植をしてる所です。それともう一つは、被害木の発見とその木の材積を調査すると言う事が出来るという事です。やはり先程もお話しました通り、私共4人位で70kmにも渡っているんな調査してるって言うのはやはり見落としがあると言う事で、そう言う被害木があったら発見して教えて頂ければ次の年の駆除の事業にも結び付けられます。さて環鳥海の白砂青松復活プロジェクト協議会の方の活動の二つ目としては、地域活動の支援という事です。まず松喰虫防除の技術指導とかはもとより、各種助成金があります。県の方からもありますし国の助成金もあります。そう言うものを収入源に鍬とか鎌とか必要な資材、のこぎりとか買っておりますけれども、そう言う物を会の方から必要があれば、必要に応じて買って、そう言う物を資材として提供しております。この写真は各種技術講習会と言う事で、毎年先ほども喋りましたけれども、被害木の発見と測樹方法の研修、それから今年の3月ですけれども樹幹注入、樹幹への薬剤注入の研修を行っております。本荘由利地域の白砂青松を取り戻す為には、やはり長期的な支援に立った活動を行わなければならないと思います。そして第一

に今している活動の足元固めが肝心なんではないでしょうか。協議会が行う色々な活動、それから今ボランティア団体が各地域グループとしてやっている活動、それから行政が行う各種支所が連携して継続的に活動する事が重要となってきます。また地域の方々と行政が一体となって、将来的に白砂青松を復活させ、時代へ継承していけるのではないのでしょうか。まだまだこの組織を作りましたけれども、やらなきゃならない事は沢山あります。その一つとしては地域の活動を指導していくリーダー的な人材の養成をしなければいけないとか、これは人づくりという事です。また地域活動に参加したい人を登録するボランティアバンクの創設。秋田辺りとか、他の地域でも、ぜひとも海岸線のボランティアをしたいと言う人もおります。そういう人が登録するボランティア団体、って言う物を作らなきゃならないんじゃないかと。被害林自体の再利用とか、それから環境や産業とか地域との連携もしていかなければならないんじゃないかと。松喰虫防除しますと、一回、枝葉集めただけでもトラック何台分と言う値段が出て来ますけれども、そういうのただ投げるだけとか、引き取り先がないと言う事で大変お金も掛かります。そう言った事もありますので分野とも連携して行きたいと、も必要なんではないかと考えております。最終的な話になりますけれども、海岸林を通じたそういった活動によって、世代を超えたつながりを持ち活力のある地域作りですね、そういうものも目指して行かなければならないかと思えます。最後になります。私達の取り組みと言うのは本当に去年あたりから始まったばかりで、まだ際立って目立った効果なんてありません。石川善兵衛さんや先人たちを見習い、当時の苦勞を偲びながら白砂青松の海岸林をみんなで守って作って行く事ではないかと言う事で私の話をまとめさせていただきます。

### 「万里の松原の恩恵に感謝し、少し汗を流そう」

#### 司会

どうもありがとうございました。続きまして庄内地域活動団体を代表致しまして、万里の松原の親しむ会の三沢英一様より「万里の松原の恩恵に感謝し、少し汗を流そう」と題しまして発表して頂きます。万里の松原に親しむ会は平成 13 年 7 月に万里の松原の松陵地区をエリアに文化遺産でもあるクロマツを守り、保安林としての機能保全を図ると共に市民の憩いの場として整備を図る目的で発足しております。それでは三沢様、宜しくお願い致します。

#### 三沢

ご紹介頂きました三沢です。私の職業生活の最後と言っても 30 歳なんです。その最後の勤務地は本荘でありました。仕事で色々と回らせて頂きまして、大変懐かしく思いますし、また酒田に万里の松原が作られる時、営林署のご紹介で能代の風の松原をイメージとして考えてはどうかと言う事で平成 2 年以降ですか、能代の方にお邪魔致しまして、能代の地元営林署やあるいは地域の人々から風の松原についての歴史や、あるいはお話を頂きました。その時も私達現在の万里の松原周辺の関係者が中心でしたけれども、帰りのバスの中でぜひ酒田でも、能代の風の松原の様なものを実現すればこんな素晴らしい事はないと、こんな事を話し合いながら、早速改めて営林署や県や役場をお願いをしよう。またその為には地元の酒田市やあるいは山形県とかからもその事業採択していく為の条例作りを働きかけようと言う事で、現在の万里の松原が具体化する際、大変秋田の人々からお世話になった事をですね今思い出しております。大変、感謝申し上げるしだいでございます。その後も時々、風の松原さんにお邪魔致しまして、現状の市民の、あるいは商工会議所さんの発する市民運動などにつきましても学ばせて頂いております。そこでこの、いったい万里の松原というのは酒田市のどの辺にあるのかと。ちょっと小さい地図で申し訳ありませんけれども、酒田市の市街地の北の方です。いわゆる酒田の運動公園、光が丘公園に隣接する地域です。これが運動公園です。野球場、陸上競技場、テニスコート、



プール、いろんな物がありますけれども、これが大体 50ha 位あります。そして万里の松原の松陵地区と言われる所は約 60ha あります。そして川があるんですけども、この川北に 60ha 位の万里の松原森林地区と言うのがありまして、ですから国有林、保安林の中の一部ですね 134ha が万里の松原として整備をされました。私達が活動のフィールドとしているのがこの松陵地区、160ha です。そして光が丘の運動公園、50ha も全く同じ感覚で受け止めていますけれども、いろんなボランティア活動する時には、場合によっては光が丘の公園も含めてボランティア活動をするという事ですね、酒田市の市街地の中に 100ha に及ぶ広い空間があると言うことは、海岸には海岸林が大自然の海岸林がありますけれども、もう一つここに、市民の憩いの場としての生活環境保全林があるという事は私達にとって生活に非常に大きな潤いを与えて頂いております。それではですね、今万里の松原は現状はどうなっているのかという事も言ったんですけども、最近庄内市民会議で冊子を作って頂きました。この中に万里の松原の紹介がありまして、ちょっと小さいですけども、ちょっと見てください。これは万里の松原の中心地帯ですけども、これはツツジですね、これは万里の松原の紹介する看板ですね。ここに市が関連事業として実施をしました、水庭、砦、子供達の遊び場、昨日酒田ではですね、いきいき酒田という市民運動をする組織がありまして、これは色々な活動を成功させようと言う時に、市民ボランティアが活動しようと言う事で発足した、実際自治活動問題を中心とした組織でもありますけれども、昨日雨がちょうど上がって良かったんですけども、約三百数十人が昨日集まってもらって松林に行って台風で落下した枝だとか、いわゆる木の折れた木とかそう言うものの清掃活動を致しました。そういうですね、所は万里の松原の現状であり到達点の一つであると思えます。そこで映像を使って説明出来れば一番いいんですけども、なにせ、ささやかなボランティア団体でありますから、身の丈に合ったお話をさせて頂きたいと思えます。先程紹介にもありましたように、今から 5 年前に発足致しましたが、発足する前にはそれなりの前進がありまして、出来た後にも、万里の松原の事業もですね、する際に当時の営林当局からは、要請があって作るけれども、維持管理はやっぱり色々な形で地域の住民も関わって欲しいと、こう言うお願いがありました。私達も全く空手形でなく、私達は地域に住んでいますから、出来るだけの事をしなくちゃねという話をして、まず約束手形を切ったみたいになっておったんですけども、しかし中々ですね継続して、付近の自治会の関係者だけでこの市民にとって、60ha の植栽林の手入れをしていくのはやはり大変な事なんでありまして、実際途中で立ち消えになってしまいました。植栽林である万里の松原の整備事業の中心は、一つは、雑木が生えておって中に入れないと、それを整備して遊歩道を作る、そしてこう言うふうにつつじだとかアジサイだとかドウダンとかハギとか中堅木を相当植えて頂きました。ところが植えて十何年ですね、全く剪定をどこもさせません。林野庁の仕事をする時の条件は、遊歩道周辺の下刈を年 2,3 回する事、それは市が自らの手でやると、それを一筆入れて多少、関連施設の維持管理をしていくと、こう言う事であった訳でありまして、そうするには剪定というか何処でもすると言う事は無かったんですけども、立派な散歩の道路が出来ましたから沢山の人達がですね朝から晩まで、ほんと朝から晩までが入っているんですね人が、あるいは走っているんです。この松林をですね、この万里の松原と命名されたこの地域を利用している私達はですね、もう少し綺麗な方に維持管理する為に少し汗かけないのかなと言うふうにならぬか何人かの人達が話し合いを始めました。そこで出てくるのは、非常に広い地域ですと沢山の対象がありますから、私達で出来るのかと言う事にまず当然なる訳ですね。でもその時私達何人かで、そんなにその全部をしようと思うと出来ないから、自分達の持っている力で、出来る所から始めてはどうだろうと、そう言う事で一年半、2 年位ですね色々議論をし、地域の自治会だとか、あるいは関係の営林署やですね、あるいは市や県の方々にご相談を申し上げながら、まず小さな、少しだけの汗とですねポケットから少しのお金を出し合って、自分達で活動を始めようじゃないかと、こう言う事で始まったのが私達の始まりです。ですから最初は三十数人の会員で発足をしました。そして国有林だし、保有林ですね。そういう所でボランティア活動をすると言うことは、最初は営林当局にとってはちょっとおっかない、何をするんだと、きちんとして保安林としての機能を害する様な事では困る訳ですから。幸い私達の発足に関わった仲間の中には何人も営林署の OB がいましたから、まだ現役の人達よりも、もっと経験を積んだ会員がいるんだからって

言うような事を私達も言ってですね、そして営林当局に話を持って行きました。松を触るんじゃない、下刈りと新しく植えたスギだとカジサイ・ハギとかこう言うものの剪定をですね、自分達の手でやるんだとこう言う話でした。しかしそれでも最初のうちは一回ごとに入山許可願いを出して、許可証を貰って作業を始める、こう言う状態でした。やっぱりね、私なんかは多少関わっておりましたから、お役所に行く事は何とも無いんですけども、一般の市民が一回ごとに営林署に行って入山許可願いを出して許可証を貰って若干報告をして、仕事をするという事は、あゝこれは面倒くさい、嫌だって感じに片付けて、なりがちと思うんですけども、そう言う所は私はたまたま多少長い間勤務しておりましたし、営林署のOBの方が何人もおりましたから、その所は意外と壁が薄くあるいは垣根が低くてですね仕事が出来たとこんなふうに思っております。でも流石にですね、私達も毎回入山届けでは何ともならないから、2年目からはまず、年間計画で3ヶ月に一度位事業計画を出して、作業をすることを認めてくれないかと、こう言う話になって参りましてそう言う事が認められる様になりました。そういう時に県の方ですね、広域の森づくり運動と言うのが山形県の庄内地域を中心にして県側も一生懸命、ボランティアやあるいは林業関係団体、そして非常に特徴的なのは、大学やあるいは小学校の先生方を巻き込んで、広域の森作りをして行こうと言う庄内海岸33kmに事業に焦点を当てて、やっへ行こうと言うそういう動きが出てまいりました。3年目以降はですね、そう言う申請なども一括して県が森林課に申請をすればいいと、こう言う状況になりまして、そういうのにつきましたは3年目からは全くやってない訳であります。そしてそれより大きな前進は、森林課の人の方々というんな場ですね日常的に会話が出来ようになりました。相互信頼ですね。私達も色々注文したり、また森林課の人の皆さんからもいろいろとお話をお聞きしたりすることが出来るような関係になってきてですね、お役所との関係は森林管理所あるいは県も市もですね大変、毎年毎年良くなって来たと言うふうに思います。皆さん方には全く見えなかな、私達の会の会報ですけども、これがこの6枚がこれまで私達発行した会報の全てです。初年度はですね、アヤメの手入れやアジサイの剪定をしたり、あるいはクスノキ広場のハギの剪定をしたり、こう言うですね、事をですね、あるいはツツジの剪定をしたり、こう言う活動を数回したに留まりました。ここで凄く私達はですね三十数人のものが作業することの楽しさ、そして三十数人が頑張れば相当の事が出来るという自信、これが出来ました。誰もですね自分の庭は手入れした事があっても、こう言う大きな所をですね手入れした経験が無い訳ですから、どれだけの事が出来るのかと、それから三十数人が皆最初から上手である訳ではないのですね、いろんな人間関係が集まって来たもの達ですから、始めて出会う人も沢山あった訳でありまして。でも一緒に作業をしたりお茶を飲んだり、たまにはお酒を飲んだりして話をするようになって来ると、もっとこんな事が出来るんじゃないかと、こう言う話になって参りましてね、やっぱり来年度からはですね、活動の輪が広がりました。そしてその中でですねやっぱり、先程もこう言うボランティア、海岸林、あるいは市民と関わりは一過性ではなくて、長い年月をきちんと継続的にしていかなきゃいけない、でも集まっているのは私を含めて100人。退職して、と言う年代の方が多い訳ですから、現職の方もいますけれども、多くは定年、そして大事な仕事も一段落、と言う人達が多い訳でありますので、そうするとやっぱり海岸林の重要性、仕事をと言う事は、改めて私達、私個人も含めて、知人も含めて酒田の海岸林の歴史を、あるいは庄内海岸の歴史を学ぶ事にもなりました。そう言う事を学ぶにつけて、先人がどんな苦勞をしてこの海岸林を作ってきたのかと、それだけでなく、庄内海岸であれば昭和25.6年から15年間かけて33kmの海岸林を植えた訳ですね。これは私達にとっては、私達の生きてきた青春の時代そのものなんでしょうね、そして植えた仕事はですね、確かに酒田営林所長をした方、能代の秋田営林局管内などでは、ほんとに海岸林の関

係では先達である、日本的先達だと思っているんですけども、こういう傑出したリーダーと共にですね、うら若き乙女達です。その一生をかけて松林を、松の木を植え育て、そして今実際 70 歳以上になっている訳です。そういう女性達がほんとにこの酒田の海岸はこちらでも象徴されるようにですね、家が砂で埋まり、船小屋が砂で埋まり、という、こう言う状況は 30 年代全般まで続いておった訳ですから、私は山形県で生まれて庄内に来たのは昭和 30 年ですけども、そしてその後本荘に来たんですけども、その当時はまだ砂が飛んでいる状態は治まっていませんでした。ですからそんな遠い事では無い、そういう事を改めていろいろな形にですね、250 年前の植林の実態、戦後の植林をですね、戦争で再び荒れ果ててしまった海岸林をどう復元していくのか、こういう戦い方を学ぶにつけて、にわかに知った事をですね、やはり話したくなるんですね。それで子供達に、あるいは先生方にあんたがだ、松林の中にある立ってる学校で、この海岸林の歴史を、現状を知らないで子供達に教育できるのだから、格好いい事言ってますね、そして地域の小学校、中学校、あるいは高校、こう言う所にですね行って話をしました。その結果今度、



家庭教育や学級で話してくれ、あるいは総合学習で話してくれないかと、こう言う事が始まってしまいました。私達では出来ませんから、県の庄内の専門の方に、今日も来ていますけれども、こう言う方々の協力を得てですね、そして子供達に説明をし、あるいはさっきも、どれ位の事が出来るかは別にして、子供達が自分の手で木を植える、自分の手で草を取る、枝を切ろう、こう言う作業を体験させると言う事は凄く大事なんではないかと、しかしこれで絶対完結はしませんから、後始末は私達万里の松原に親しむ会が、それからと言うようなかっこいい事言ってますね、そしていろいろ

と問題を提供しながら一緒に学び、一緒に作業をしようと言う働きかけをして行きまして、2 年位前から子供達や地域の人々との共同作業が少しずつ始まりまして。そして大きな転機を迎えたのがですね、去年酒田市は市制 70 周年なんです。酒田市制 70 周年を迎えるにあたって、万里の松原を舞台にした記念事業をしようと市の農林部長が私に言うんですね、そして何か考えてくれと言う事で、私達もそれをまともに真面目に受け止めてですね、計画を、万里の松原の役員会でチームを作って作り上げました。市の方がそれを市の事業として私達はしてくれるんだと思ったら、あんたの方がそれをやってくれと言うんですよ。多少金をくれるのかなと思ったら金を 1 円もくれない訳ですね、しかし国土緑化推進機構に補助申請、助成申請の手伝いをする、こう言うことで助成申請を約 80 万程しました。そしたら 50 万円決定を頂きまして、事業を大幅に縮小しなくては、と思っていたら県の方で緑募金の関係で減額された分を全部足してくれると、こう言う事になって当初の事業計画通りになりました。しかし私達にとってはあまり権限は無いんですね、でもまずせっかく夢のような事を考えて、やろうと思った事はやっぱりやろうと。いうことで、一つはですね 70 周年記念で、60ha の中にまず、2、3ha 弱位の地域をですね、自然観察教育委員という地域を設定してもらって、ここは整備する時、果物を植えたんですね。ところが疎林状態で松が十分植わっていませんから、季節風でやられて殆んど枯れてしまって、全体が疎林状態なんですね。そこに何とか私達、緑を復元する作業を志にしようと、こう言う事を計画をしまして、どんなに、5 年がかりでいろいろなものを作って行こうと。一番最初に記念植樹の集いと言うのを、松の木をまず植えました。一番風上の所にですね松の木を植えました。その時も子供達に私達の都市ですね、50 年後には付近のあの位の木になるんだよと、あなた方が中学校になるとこれ位だよ、こんな話をですね、営林署の先輩の人達から子供達に教えて頂きながら、それで小学校、中学校、高校とそういう形で自分達が植えた木を見守っていく、見守るだけではなくて、年に 2 回は草を取らなければ松の木は育たないのだと、その後枝打ちもしなくちゃいけない、中学生位までの年は義務教育期間のなんらかの形で松の手入れをしていかないと駄目だよと、そういう形で関わりを持ってもらうのが私達は教育だと言うふうにですね、先生方にも話をしました。そしてそ



の後ろの風下に、その地域で拾ったドングリで芽出したものと加えまして樺を植栽をしました。そしてそれだけではちょっと面白くないと言う事で、各学校で教育林と地域に五つの、坪にしたらどれ位ですかね、五つの地域を設定しまして、それを小学校二つ、中学校二つ、高校一つ、ここにそれぞれあなた方が計画して、自らの手で木を植える、金が無ければ我々も協力して一緒に植えましょうと、こう言う事になっておりまして、まだ始まってませんけれども、10月にはだいわ中学校が最初にその木を植える準備を10月か11月にする予定になっています。そういう事もあり、森林管理所の方などにもいろいろとご協力をお願いしながら、ご相談をしながらそういう作業を始めています。ひょうたんから駒のような形で、活動が一気に拡大をしまして、その時に先程河合先生がお話がありました、やっぱりボランティア作業で汗を流すだけではなくて、私達自身が手入れした、ツツジを眺めてお酒を飲み交わすとか、あるいは音楽を聴くとか、そういう潤いが、楽しさが無ければ長続きしないんじゃないかと、こう言うことで、手作りの森の音楽会を聴いてみようという話をしましてですね、こう言うふうにツツジがですね綺麗になるまで3年がかりです。ところが今年はずいぶん暑いですから、予定した時はツツジが盛りを過ぎてしまったんですけども、今年5月ですね、皆さんのお手元に差し上げました音楽会の関係のですね、ありますけども、これも全く手作りなんです。地域の吹奏楽部の生徒に来て頂いたんですけども、この後ろにありますです大団幕は、中央高等学校の美術部の子供達が描いてくれました。それから特別養護老人ホームなんですけども、ここに入所している、あるいはデイサービスに通っている子供達を介助する事を助ける為に中央高校生徒会では先生方もご理解を頂いて、授業免除で協力を子供達が介助で携わってくれました。それで地域の人達が集まって、森の中で300人を越える人達が集まってですね、最後にふるさとの大合唱で終わったんです。そういう手作りの音楽会の事も出来る様になった訳であります。さらに子供達に国土緑化推進機構の助成を頂いて、やはり海岸林についての歴史、現状そして戦後の植林の歴史、私達はですね県の特別専門員の、私を先頭にして、この庄内33kmの海岸林を15年間で完成させたとするのは、まさにNHKでよくやるですねプロジェクトX並みの大事業であったんじゃないかと、そう言う事を子供達にですね、きちっと伝えていかないと。色んな人達が色んな形で、250年間努力して来た結果として現在の松林があるし、今もなお努力し続けていると、ですから海岸の大自然で音楽会だとか、あるいは風の強い日海岸の大自然の中の林に入ると、どんなに静かな空間であるかと、こう言う事を身をもって体験させると言う事で子供達が驚きを感じるんですね。ですからそう言う事をですねしていく訳ですけども、私達大変つくづく思いますのは、二つの小学校で、松原の記念碑を見た子供は誰もいませんでした。それから酒田に大きな神社あるんですけどもその脇に、もう一つ神社があることも知りませんでした。そういう歴史をやっぱりきちんと大事な地域の歴史を教えていくと。それからこの万里の松原のですね、中に私は昔松尾芭蕉が歩いた秋田街道のですね、その酒田の部分があるんだと言うふうに思っています。酒田には秋田町という町があり、その隣は天馬町なんですね、この天馬町で福田から浜中までちょうど、庄内海岸林に匹敵する三十数キロの天馬道があって、これが今の万里の松原の真ん中を通っていったというふうに思っていますから、ですからこれは由利地方のですね、庄内との深い結びつきを考えると、万里の松原はまさに昔の大動脈が通っていった所ではないかと、ここを松尾芭蕉が歩いたんだよと言うような事を、高校生に話をしながら、作業をしたりしていますね。そして奥の細道での文章をですね、話をしながら松尾芭蕉を始め、多くの人々が歩いた経験の元、私達はその恩恵をこうむっているんだなど、だから何とかしていかなくちゃいけないんじゃないかと、こう言う事ですね、こういう学習の場合は勿論ですけども、ここにもですね光が丘の桂林、中央高校270人の学校周辺での作業と、こう言う作業の前には必ず一時間程度の学習をですね、県の専門官から来て頂いて、出前講座を県の職員が来て頂いて、そして歴史を学び、作業の必要性を理解してもらいながら子供達が作業してもらおう。そしてまた地域は勿論出来るだけ必死になって作業をする。校長先生も先頭に立って作業せんと、こう言うふうな形で話をしてですね、作業をしています。今回台風の後もですね、学校にて大変、大変だったねという話をする訳ですね、大変だったと思うんじゃないかと、大変だったんだから、何が出来るんだろうかなと先生考えたか、松の枝位だったら拾えるんじゃないかな、そういう問題定義をしまして、二つの学校で、この台風の松の枝拾い学園活動を実施しました。そして昨日はまた市民

の作業運動がありましたし、さらに残りの学校に対しても出来ないかと、こう言うですね働きかけをしていました。こう言う事の積み上げが大変大事なんだと言うふうに思っています。多少学校よりの話になってますが実際はですね、少しの汗を流そうと言うふうに言ってきた事からすると、いま会にとっては相当な汗をですね流さなくちゃならない状況になっています。下刈りはしなくちゃいけない、剪定をしなくちゃいけない、作業する時には準備の作業から後始末まで全部しなくちゃいけないんですね、それで県の職員との関わり、色々と面倒見てくれるんですけども、私達の地域の場合は、出来るだけ地域の大人たちが自前で協力はして貰いますけれども、企画・立案、色んな事は自前でやってみようと言う事でやっていますね、そして協力してくれと、言う形で協力を営林署あるいは森林管理者の皆さん、最近では酒田に朝日村ふれあいセンターさん、東北で一箇所、林野庁で作って頂きましたので、そのふれあいセンターの方々の、来てわざわざ朝日村からですね、何十キロも車を運転して酒田まで来て頂いて一緒に、子供達と汗を流すと。こういう作業をして頂いておまして、またそこで一言二言このふれあいセンターの、森林管理局のふれあいセンターの方々の話をして頂くと言う事は、子供達にとっては大変大きな事だと私達は思っています。そう言う事をですね一つ一つ積み上げながら、こう言う活動をして行きたいと思っております。しかしやっぱり一番頭の痛いのはですね、やはり高齢化して来た組織に、ぜひ新しい、若年寄を会員に募集して会員の輪を広げていく、現在は 83 人です。それに学校とか地域の自治会連合会だとか、あるいは営林署の OB の方々だとかですね、こう言う方々のご協力を得てやっている訳ですけども、そういう力に支えられて、市側からもですね相当期待を、あるいは仕事をお願いされる、こう言う状態になって来てまして、それをやり遂げると言う事には中々実際上ですね、大変な状況もございます。でも私達はこう言う活動の中での楽しさ、自分達自身の為に行っているんだと言う、そう言うふうな事を踏まえてですね、来年の憩いにも向けて頑張っていかなきゃいけない、こんなふうに思っています。会も4年間の活動であり、しかも限られたフィールドの中での活動ですけども、ただ自治体で作業のある時には出来るだけ応援の人を出すと、川で作業する時には酒田のいわゆる最上川の南の方での作業する時には、参加しよう、そう言う取り組みが一生懸命私達もしていますし、そして県の中でも研修活動、研修の機会を作って頂いていますので、そういう参加もしています。やっぱりもう一つはですね、財政の問題。逃げて通れないんですね。道具も買わなくちゃいけないし、保守管理もしなくちゃいけないし。そして道具置いておける置く場所も必要なんですね。今は地域のコミュニティーセンターの防災倉庫の一部に道具を入れていますから、鎌の10丁何々10丁と言うふうになってきますと、その置き場が必要になってきます。ですから私達は万里の松原国有林の一角に作り上げようかと、中々ボランティア所有のですね、建物を国有の中に作るという事は困難ですからという話をしています。金を出し合って作る、出し合って、私達が金払う訳ではありませんから、民間のいろんな助成団体、助成する企業などに、要請をしながら力を合わせて作っていく。労働奉仕で作るって言う事は出来るんだと、こう言う話をしている所でもあります。そしてやっぱり活動していく為には、たまり場も絶対必要だと言う事もありますし、だから機械だとか道具もですね、鎌やはさみやのこからですね、いろんな物が必要ですね。保安帽も必要だし、帽子も必要ですし、今日帽子持って来たんですけども、やっぱり一生懸命活動するという為にはそう言う物も必要ですし、それから、これからはチェンソーだとか、刈り払い機なども台数が少ないですから、刈り払い機をもっと沢山準備しなくちゃいけないだとか、子供のはさみにしたって一回ごとに保険料が掛かるでしょう、ですから本当に活動していくにしても、そういう財政的な基盤というものが絶対必要と思うんですね。ですからその辺についてもですね、ぜひボランティア団体を立ち上げる時に、立ち上がり資金みたいなところをですね、いっぺんの活動をして力がついて来れば財政的にもあれでしょうですけども、立ち上がりなどはもう少しちょっと、行政やあるいは民間の企業が協力してくれるって言う体制などの行政も含めてですね、作り上げて頂けると大変有難いんじゃないかというふうに思っています。そして森林対象枠もですが、色々と変化が出てまいりまして、あと私の話も終わりますけれども、台風で万里の松原の沢山の木が折れました、特にポプラなどははじめとする木は見事に折れました。そういう植栽については調査課の方からご相談があって、地域の方々と相談して植えれば一番いいんじゃないかと思うけども、こう言う話になりまして、先日地域の自治会と私達と

庄内の調査課の方々が現地が集まって頂いて相談をしました。そして地域の方々の話を、希望を聞いて植えていく、出来れば一緒に植えようと、作業と一緒にしようと、多少の維持管理は地域で関わっていかうと、こう言うですね、話になって参りまして、近く具体的な相談をする、あるいは植栽をすると言う事になっております。ですからやっぱり私達が作業をし、持続してですね、一定の水準の、作業能力をやっぱり持つことが出来るんであると、お役所の側でもですね、一緒になっていい地域を作っていく為にいろんな形で地域に配慮した仕事をしてくれると、言う事を今実感をしています。そう言うふうな事を一つ一つ積み上げながらですね、今年よりは来年と言うような思いで、今活動をしています。まだ4年間しか立ってないささやかな私達の活動でありますけれども、いろんな方々のご協力に支えられ、特に私達の会員の皆さんのもとにボランティア精神でのですね、活動に支えられて、こういう活動の歩みをですね、させて頂いているとこんなふうに思っています。是非ですね秋田の、特に由利の皆さんと昔から長いお付き合いを頂き、今私達がやっているような、こう言うこの白砂青松を取り戻す戦いのですね、力合わせてやっていければいいな、鳥海山というお互い共有するですね、素晴らしいものがある訳ですから、そういうものも視野に入れながら、いい地域社会というものを作っていく為に、お互いに汗を流し合う、そして象潟でこう言う事を頑張っているよと、小砂川でこうだよとかですね、本荘でこうだよと言うふうな事をお互いの励まし的事として、エールを交換しながら作業が出来ればどんなにか素晴らしいものかとこんなふうには思っています。ちょっと長くなってしまいましたけども大変拙い活動報告ですけどもご報告に変えさせていただきます。どうぞ清聴ありがとうございました。

#### 司会

どうもありがとうございました。せっかくの機会でございますので、河合様、土田様、三沢様に対しまして、質問を受けたいと思います。どなたかおられますでしょうか。ちょっと時間も押していますので、では河合様、土田様、三沢様、本日は大変貴重なお話を頂き大変有難うございました。もう一度大きな拍手をお願い致します。どうぞご来場の皆様も、今後の海岸線の保全活動の参考にして頂きたいと思えます。それでは最後に秋田県由利地域振興局農林部木村部長より活動定期をお願い致します。



#### 木村部長

本日は環鳥海白砂青松復活プロジェクトフォーラムに大変お忙しい中、講師の先生を始め沢山のご来場の皆さんのおかげを持ちまして、無事に終える事が出来ました。主催者を代表致しまして厚くお礼申し上げます。本日の基調講演、あるいは活動発表で、私達の海岸線の成り立ち、歴史について思い起こさせて頂き、今後の海岸線の果たす役割と言うような事を切実に肝に銘じております。色々な松を守る活動に参加されている方は今日のフォーラムを聞いて、さらに一層の飛躍と、またこれから取り組もうとする皆さんに付きましては、このフォーラムを経験しながら、さらに活動を続けて頂ければ幸いです。なお当舎の局長の挨拶の中にもありましたように、10月の3日、来週の日曜日ですけれども、白砂青松プロジェクト推進協議会が主催する、一斉行動が計画されております。ご来場の皆さんも是非お忙しいでしょうけれども、是非ご参加下さる事をお願い申し上げます。本日はどうぞご苦労さんでした。

#### 司会

以上を持ちまして白砂青松復活プロジェクトフォーラムを閉会させていただきます。本日のご来場誠に有難うございました。